神代の残滓、妄執の敗者

二体目、パラサイトテンタクル。

本体は熊じゃなくて触手だったらしく、一本あたり五分かけて残った触手の妨害を避けながら根元から切り落として七本切り落としたところで熊も動かなくなりクリア。挑戦回数四回。

三体目、ゴブリンベルセルク。

めっちゃ強いゴブリン、としか言いようがなかったがめっちゃ強くてもゴブリンだった為、犬やら触手よりかは楽な部類だった。挑戦回数二回。

四体目、ダイナボア。

クソイノシシ、突進中に鼻にぶつかると爆発するという能力自体はさほどでもなかったがスタミナがおかしい。測ったら一度の突進で二十秒くらい走り続けていた。俺にロデオの心得がなければもっと時間がかかっていただろう……いやゲーム内の経験だからリアルじゃ五秒もロデオなんてできないだろうが。挑戦回数一回。

五体目、トキシックイーグル。

おまえ、ほんと、まじ、ゆるさん。挑戦回数三十二回。

六体目、アーマード・ラーヴァ。

いやほんと、攻撃の届かない上空からひたすら毒攻撃かましてくるクソ鳥に比べたら攻撃した部位の装甲が散弾よろしく弾ける程度屁でもないね！ 冷静に考えればこいつも大概アレだったがその前がその前だったのでアドレナリンで見てから避けて押し切った。挑戦回数一回。

晩御飯は鱚の天ぷら。

七体目、エクスキュートパンサー。

速い、強い、だが硬くはなかった。プレイヤーの視界の外に回り込んでから攻撃する、という特性は分かってしまえば対応はあまりに容易く、休憩を挟んだことで精神的余裕を取り戻した俺の敵ではなかった。挑戦回数一回。

八体目、ツインヘッドタイガー。

可もなく不可もなく、普通に強かった……それだけ。挑戦回数二回。

九体目、ベータユニットゴーレムS2型。

仮称として右腕による攻撃をA、左腕による攻撃をBとした場合、AからAへ繋げる場合はほとんどの時間差なく攻撃を叩き込んでくる。しかしAからB、またはその逆の場合は胸部のコアが一瞬光る。これによってある程度の攻撃予測が可能であり、元々のゴーレムの体高とこちらの身長の差を考えるにA、B双方の攻撃にも規則性が発生する。それによって攻撃の回避及びアクションの攻撃判定が消失した瞬間に腕部を利用した駆け上がり、及びコアへの肉薄が可能であると推測、実践したところ不可視のエネルギー場による弾き飛ばしにより体力の七割を削られたことで方針の変更を余儀なくされ方針変更の結果装甲を直接剥がすことで弱点の露出を（ここらへんでキレた）はぁーっ！ 背中は車のボンネットみてぇなうっすい装甲のくせに反重力フィールドとか上等なもん発動してんじゃねーよ面倒なんだよオラァ！ そのアクション、時間経過とプレイヤーの位置の両方がフラグの技じゃなかったらお前ほんと許さんかったぞ……挑戦回数七回。

「エムル……ラストは、なんだ……」

「ち、ちょっとお休みした方がいいですわ！？ おめめが怖いですわ！？」

「いや……大丈夫だ……こうなってる時は、すこぶる上手く動けるんだ……」

俺はこの状態を「ロスタイム」と勝手に呼んでいる。精神はオチかけてるが肉体は最適化された状態……意識は飛んでいるのに身体は勝手に作業プレイを遂行していたりと、肉体面に疲労の概念が存在しないゲームだと二徹くらいするとこうなる。

そろそろ朝だが、ここまで過密に戦って来たせいで予想以上に疲れていたようだ。作業なり目的なりを達成した瞬間にプツッと意識が落ちるものの、この状態の時はエムルにも言った通り、身体が俺の反応に普段以上に素直に反応してくれる。

つまり、このユニーククエスト最後のモンスターが突然クイズなどを仕掛けてこない限りは俺はほぼベストパフォーマンスで相対することができる。

「十体目は……お、カシラが今からふんづかまえてくるって……」

「なんでぇ、もう九体目まで終わらせちまったのかい」

噂をすれば影がさす、フラグを建てれば兎が来る。人参をキセルよろしく齧り咥えながら現れたヴァッシュは驚いたような、しかしある意味予想通りだとでも言いたげな顔で俺とエムルを見る……そりゃ、九体倒したフラグで現れたんだろうし予想通りだろうさ。

「えーと、兄貴……最後のモンスターってのは……」

「おう、ちょいと遠出してふん縛って来た」

ヴァッシュはニヤリと笑みを浮かべるとくいと鼻先で何かを、それはきっとヴァッシュが捕まえて来たと言うモンスターを示しているのだろう身振りでこう告げた。

「俺等(おいら)が捕まえた奴ぁ……ま、言っちまえば今のおめぇさんにゃあ倒せねぇだろうな」

「えぇ……」

「だからぁよう、こいつに関してだけは達成の条件を俺が決める」

ポキリと人参を噛み砕き、ヴァッシュは俺へと告げる。

「五分間、生き延びろ」

「成る程、耐久系ね……上等だ」

そしてそれ(・・)は俺の前に現れる。

四脚スタンドを思わせる四本の足から伸びた異様に細い胴体は、驚くことに人型のモンスターである。

ボロ布だってもう少し上等だと思える程のもはや切れ端としか言いようのないローブの残滓と、干からびた皮と骨によって握られた杖、そして何よりズタボロの三角帽子がそれが魔術師だったと言うことをかろうじて俺に教えてくれた。

「なんだ、こりゃ……」

「妄執の樹魔(ルーザーズ・ウッズ)、昔々のずぅっと昔……木と合体してでも生き延びようとしたバカヤロウ共の一人よう」

言われてみれば、干からびているにしても妙に生物感がない身体は、枯れた木の皮であり、ミイラなのか骨なのかは知らないが長い時が経過したにしては随分と生え揃っていると思っていた髪は枝だ。

「派手に啖呵切ったんだぁ、イキるだけの根拠ぉよう……見せてくれや」

妄執の樹魔(ルーザーズ・ウッズ)、Lv.120。

シャングリラ・フロンティア全プレイヤーの中でもこの大陸に(・・・・・)存在しない(・・・・・)モンスターであるこいつと戦ったプレイヤーは俺が初であることを知るのはもっとずっと先のこと。

妄執の樹魔はトリエントを魔術特化させたようなモンスターです。

シャングリラ・フロンティアのモンスターは大きく二種類に分けられ、こいつはヴォーパルバニーやリュカオーンと同じカテゴリのモンスターです。その二種類が何かは今は明かしません。